

(様式3-1)

平成28年 1月15日

## 事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 国立大学法人京都教育大学

所在地 京都府京都市伏見区深草藤森町1

代表者職氏名 学長 位藤 紀美子

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

## 1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

## 2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	こくりつだいがくほうじんきょうときょういくだいがくふぞくもやまちょうがっこう	ふりがな	さかきばら のりこ
学校名	国立大学法人京都教育大学附属高等学校 〒612-8431 京都府京都市伏見区深草越後屋敷町111	校長名	榊原 典子
ふりがな	こくりつだいがくほうじんきょうときょういくだいがくふぞくもやまちょうがっこう	ふりがな	さかきばら よしひろ
学校名	国立大学法人京都教育大学附属桃山中学校 〒612-0071 京都府京都市伏見区桃山井伊掃部東町16	校長名	榊原 禎宏
ふりがな	こくりつだいがくほうじんきょうときょういくだいがくふぞくもやましょうがっこう	ふりがな	なか ひろし
学校名	国立大学法人京都教育大学附属桃山小学校 〒612-0072 京都府京都市伏見区桃山筒井伊賀東町46	校長名	中 比呂志

※本学には、小中一貫教育を行う教育課程特例校指定を受けた附属京都小中学校があり、今回の研究に関して研究校指定の申請はしないが、附属桃山小学校、附属桃山中学校との比較対象としてデータの検証等において学内的に研究協力(学内研究協力校)を行う。

## 3. 研究内容

## (1) 研究開発課題

グローバル化に対応し、小学校から高等学校まで系統的な英語カリキュラムを開発し、海外に通用する英語表現力並びに英語コミュニケーション能力を育成する。

## (2) 研究の概要

1. 小学校1年生から小学校4年生までは、英語活動型とし、英語に慣れる、体感するカリキュラムを作成し、コミュニケーション能力の素地を養う。
2. 小学校5年生から中学校英語につながる英語科(教科)とし、話す・聞く・読む・書く活動を取り入れたカリキュラムを作成する。
3. 中学校2年生からは高等学校英語につながるカリキュラムを開発するとともに、世界に通用する英語コミュニケーション能力の育成を図るために海外との交流プログラムを開発する。

## (3) 現状の分析と仮説等

## ①現状の分析と研究の目的

グローバル化の進展によって、我が国を含む世界はめまぐるしい速さで変化を遂げており、我が国においてもグローバル化に対応した教育のあり方を考え直すことが急務である。京都教育大学ではそのような社会情勢に対応し「グローバル人材育成プログラム」の開発に着手する。

グローバル人材育成プログラムにおいては、英語力の強化、英語コミュニケーション能力の強化は欠かせない。そこで、本事業では、附属学校園として幼稚園から高等学校までの全ての校種を擁する教員養成大学である京都教育大学の特色を生かし、大学と附属学校園が一体となって、小学校・中学校・高等学校が一貫した「英語強化カリキュラム」を開発するものとする。

## ②研究仮説

小・中・高一貫カリキュラムを作成し、小学校・中学校・高等学校において身体的・情動的に活性化する指導を通して自己表現力やコミュニケーション能力を育成することで、海外に羽ばたく人材の育成につながる。

## ③研究成果の評価方法

- ・児童・生徒の興味・関心等の学習状況の変容について、定量的に把握できる評価法を検討し、実施する。
- ・外部団体（教育委員会）等からの評価を受け、改善する。

## (4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 3 学年 1 コマ	第 1 学年 1 コマ	第 1 学年 1 コマ	第 1 学年 1 コマ
②小学校 教科型	第 5 学年 1 コマ	第 5 学年 2 コマ	第 5 学年 2 コマ	第 5 学年 2 コマ

## (5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

## 第一年次～第四年次，校種別

## 第一年次

## 【全体】

- ・大学教員を中心に小中高一貫カリキュラムの作成，指導内容，指導方法について，研修会の充実を図る。
- ・各校種の指導内容について共通理解し，英語教育における目指す生徒像を確認する。
- ・各校種において研究授業を開催し，研究会において教材観・生徒観・指導観を中心に意見交流を図り，生徒の実体把握に努める。

### 【小学校】

- ・京都小中学校の小中一貫英語カリキュラムを全校種（小・中・高）担当で検証する。
- ・桃山小学校1年生から4年生においては、「Hi, friends!」を実施するとともに今までで行っている英語活動を授業参観やカリキュラム検討を通して検証する。
- ・桃山小学校・京都小学校の5年生・6年生では（英語）教科として、身体と情動を動かす体験を積ませる指導を行うとともに中学校1年生の指導内容をオーラルで導入し、スムーズに中学校英語に移行させる。

### 【中学校】

- ・小学校英語を経験している生徒に対して、中学校英語では、何からどのように学習を進めるべきかを全校種（小・中・高）担当で検討し、系統的なカリキュラムに着手する。
- ・中学校英語教員が5・6年生の英語授業を担当し、5・6年生の英語授業にTTとして参加できる体制を作る。

### 【高等学校】

- ・小・中学校英語カリキュラムの検証・検討に携わる。
- ・中学校英語から高等学校英語にスムーズに移行していける中高一貫カリキュラムを検討する。
- ・小学校、中学校の英語授業を参観し、到達目標設定に関して高等学校、大学を見通し、検証する。

## 第二年次

### 【全体】

- ・小・中・高における英語教育高度化を目指した教育課程編成研究の中間報告として、小・中・高が合同で教育実践発表会を実施し、参会者との意見交換の場を設定するとともに、文部科学省教科調査官をはじめとする英語教育の有識者に協力を要請し、参会者とともに英語教育の今後について講演等を通じて研修を行う。
- ・各校種において研究授業を開催し、研究会において教材観・生徒観・指導観を中心に意見交流を図り、生徒の実体把握に努めるとともに、小・中・高一貫した到達目標及び学習内容の練磨を行う。また、一般公立学校にも公開する。
- ・大学教員を中心に小中高一貫カリキュラムの作成、指導内容、指導方法について、引き続き研修会の充実を図る。また、大学教員が理論の部分を支援し、授業研究、指導法、教材開発などについて教員研修や指導を行うとともに、成果検証（情意面のアンケート、Can-Do 評価、リタラシー評価の開発と分析）の実施・分析に関して指導・支援を行う。
- ・京都府・京都市教育委員会の主催する英語教育研究会等との連携を図り、授業研究会及び授研究協議会を通して意見交換を行う。また、意見交換を通して公立学校での英語活動の現状を捉え、英語教育高度化に向けた教育課程・授業内容改善の資料とする。

### 【小学校】

- ・小学校1年生から4年生の英語活動において「Hi, friends!」以外に「聞くこと」及び「話すこと」を中心とした活動を通して言語や文化について理解が深まる教材を開発する。

- ・ALT との指導方法に関する研究会を持ち、指導内容を確認する。
- ・JET プログラムによる ALT の活用を図る。
- ・第 1 学年から週 1 回の授業時数を確保することを目指し、教育課程の変更を行う。小学校における基本単位である 4 5 分間での学習のあり方を工夫・検討し、児童の英語力伸長を図ることを目指す。

#### 【中学校】

- ・英語教育における小中ギャップが生じないような経験をした中学生に対して、身体と情緒を活性化する指導を行うとともに、英語の授業は、ほぼ英語で実施する。
- ・外国人と 1 対 1 で会話できる場面を増やし、英語コミュニケーション能力の獲得に努める。
- ・スピーキング・リスニング・リーディング・ライティングのバランスを考え、4 技能を総合的に学習し、英語表現能力の育成に努める。
- ・中学校英語教育の高度化に向けて、4 技能を統合的に向上させる、より効果的な授業を行うことができるよう、さらなる研修・研究を進めていく。
- ・本学校に在学する高度な英語力を持つ帰国生徒が、その英語力を維持していくための指導方法を検討し、さらには、帰国生徒が他の生徒の英語力の向上にも貢献できるように、工夫を進めていく。
- ・第一年次に作成した年間計画及び CAN-DO リストの内容が、更に充実したものとなるように検討を進めていく。
- ・4 技能の向上に向けてのより効果的な指導を目指すために、生徒たちの英語に対する意識調査や英語力に関わるデータを蓄積していく。
- ・英語教育の高度化に向けて、TPR 及びラウンド制の効果的な活用を更に実践し、研究を進める。
- ・大学教員との連携を密に行い、英語教育の高度化に向ける指導助言を得ることで、本研究の内容及び質を高める。
- ・大学が研究指定を受けている「グローバル人材育成プログラムの開発」に関わる研究と、本研究指定との効果的な連携を意識しながら、さらなる研究を進めていく。

#### 【高等学校】

- ・小・中学校英語カリキュラムと高校英語カリキュラムをつなぎ、校種の移行がスムーズに行えるカリキュラムを開発する。
- ・高等学校カリキュラムでは、自分の考えや意見が英語で主張できるような場面を設け、既存の教科書学習から発展的な学習に取り組みグローバル人材育成につなげる。
- ・発展的な学習に取り組ませるために、2 年生文系生徒に対して週 1 単位の選択授業を設定する。

#### 第三年次

##### 【全体】

- ・引き続き小・中・高を一貫した英語カリキュラムの実践に努める。また、それぞれの校種で出てきた課題について検討し、改善を図る。
- ・引き続き、各校種において発展的な学習に取り組み、各段階において一定の語彙力の獲得に努める。

- ・海外との交流を通して、英語コミュニケーション能力を発揮できる場面を設定する中で、生きた英語力につながっているか検証する。
- ・3年経過した生徒に対してアンケート等により調査し、成果を確認する。
- ・各校種において研究授業を開催し、研究会において教材観・生徒観・指導観を中心に意見交換を図り、生徒の実体把握に努めるとともに、小・中・高一貫した到達目標及び学習内容の練磨を行う。
- ・京都府・京都市教育委員会の主催する英語教育研究会等との連携を図り、授業研究会及び授研究協議会を通して意見交換を行う。また、意見交換を通して公立学校での英語活動の現状を捉え、英語教育高度化に向けた教育課程・授業内容改善の資料とする。
- ・京都府・京都市教育委員会との交流を活性化し、免許更新講習や採用10年目研修等の教員研修と連携を図り、授業実践の交流や、教員研修のあり方について模索する。

#### 第四年次

##### 【全体】

- ・小学校教員対象の英語研修会を総括し、より需要に応えるかたちの研修会を開発する。また、京都府・京都市教育委員会との連携をより密に行い、教員研修の一つとして研究開発した研修プログラムの実施を行う。
- ・小学校英語を経験した中学生・高等学校生の成果と課題を明確にし、身体と情動を活性化する指導を継続して研究する。
- ・小・中・高における英語教育高度化を目指した教育課程編成研究の最終報告として、小・中・高が合同で教育実践発表会を実施し、参会者との意見交換の場を設定するとともに、文部科学省教科調査官をはじめとする英語教育の有識者に協力を要請し、参会者とともに英語教育の今後についてシンポジウム等を通して交流を図る。
- ・各校種において研究授業を開催し、研究会において教材観・生徒観・指導観を中心に意見交換を図り、生徒の実体把握に努めるとともに、小・中・高一貫した到達目標及び学習内容の練磨を行う。
- ・京都府・京都市教育委員会の主催する英語教育研究会等との連携を図り、授業研究会及び授研究協議会を通して意見交換を行う。また、意見交換を通して公立学校での英語活動の現状を捉え、英語教育高度化に向けた教育課程・授業内容改善の資料とする。

#### ○平成27年度の進捗状況・課題

##### 【全体】

- ・平成28年2月5日に小・中・高の計9授業を公開し、事後協議会及び参会者との意見交換会、文部科学省教科調査官による講演を含めた中間報告会を実施する。
- ・小・中・高の一貫した学習到達目標を設定し、さらに各校種・学年における到達目標をそれぞれが設定したうえで、日々の授業実践との融和を図った。
- ・月1回の研究担当者会議を実施し、日々の授業実践の交流や学習到達目標の作成等を行った。また、運営指導委員会での意見を踏まえ、研究仮説の実証の方法や、児童・生徒の英語力向上の現状を調査する方法等の交流を行った。
- ・京都府・京都市の主催する研究会をはじめ、外部の英語教育関係学会と情報交流を図り、本研

究の進捗状況にかかわる実践報告等を内外に複数回にわたり報告・発信した。

- 学習到達目標を基にした日々の授業実践の積み上げを行うとともに、各校の年間計画や指導内容の見直しや、研究担当者全体での研究協議会等を行い、児童・生徒の学びの姿を全体で見ていく必要がある。
- 小学校英語の授業時数を倍増させたため、次年度に中学校及び高等学校へ進学する児童・生徒の英語力について、今年度との違いが想定されることから、高度化に合わせた授業の改善が必要となる。
- 文部科学省の新学習指導要領の方向性を常に確認し、研究の方向性や内容が大きく逸脱しないよう日々修正を図っていく必要がある。
- 拠点校として作成したカリキュラムを公立学校と連携しながら、どの学校でも実践可能なものに修正していく必要がある。
- 小学校、中学校及び高等学校における、それぞれの段階での到達目標を小中高の継続性・系統性を持たせた一貫した指標として **Can-Do** の形で示しているが、各校種の目標についても、更に議論を重ね、児童・生徒の英語力の向上につながるものに改善を加える必要がある。
- 指導法や指導内容の検討も含め授業改善につながる授業研究をより頻繁に行い、小中高の教員がそれぞれ授業参観を行い意見等を述べ合う機会を増やす必要がある。

#### 【小学校】

- ・ 小・中・高一貫した学習到達目標を基に、小学校独自の学習到達指標（CAN-DOリスト）を作成した。
- ・ 平成26年度より英語の授業時数を全学年において倍増させ、低・中・高学年それぞれでの研究の重点を作成し、児童の学習意欲を向上させ、学習した表現を使いながら進んでコミュニケーションを図ったり、自らの考えを発表したりすることができる教材や授業方法の開発に取り組んだ。
- ・ グローバル人材を育成するという観点から、他教科・領域との連携を図るとともに、発達段階に応じた言語や文化の気づきを重視し、言語や文化への理解が深まる教材作りに取り組んだ。
- ・ 年間3回の校内研究会を持ち、JTE・ALT・HRTの3人での指導のあり方や教材の工夫、教科化に求められる内容に関する事後協議会を開催し、教員の共通理解を図った。また、本学英文学科教授から指導助言を受け、授業改善の手がかりとした。
- ・ 高学年における補助教材の活用方法について検討するとともに、「読む」「書く」に関する導入方法について先行研究を基に実践・検証をした。
- ・ CAN-DO指標を基にした日々の自己内省シート（振り返りシート）を全学年において実施し、児童の学習の状態を把握するとともに、児童の学習意欲の向上や継続の様子を確認し、授業改善の資料とした。
- ・ 他府県の拠点事業担当校からの視察を受け入れ、授業を見ていただくとともに、進捗状況等の交流や研究の方向性について協議した。
- ・ 第3学年以上において、英語学習に関する調査を行い、学習意欲の現状や設問間の相関などの分析を行った。
- ・ 児童英検をはじめとする外部テストを活用し、児童の英語力の伸長状況を他の方法からも確認するようになった。

- ・教科化に向けた評価についての検討を行い、文言評価に加え、高学年においてはパフォーマンステストやペーパーテストの試行を行った。
- 今年度の実践を基に、高度化する際に新たに取り入れる言語材料や単元構想について、取捨選択しながら更に強固な年間指導計画を作成する必要がある。
- 英語学習に関する調査を継続し、児童の学習意欲や英語力に関する状況の比較分析を行い、実践による具体的な児童の変容を見取る必要がある。
- 文部科学省の新学習指導要領をはじめ、今後の英語教育の方向性や内容、実施に向けて必要となる準備等について、英語担当として全教員に発信し、小学校全体で共通理解を図れるよう、研修等を行っていく必要がある。
- 実践に活用した教材を整理し、年間計画とともに保管するなど、教員の異動による指導内容や指導方法の空洞化を防ぐ方策を進めていく。

### 【中学校】

- ・有効な小中接続、中高接続及び中学校英語教育の高度化を意識した 2015 年度版の CAN-DO リストを完成させた。
- ・小学校外国語活動を経験してきた中学校 1 年生に対するスムーズな小中接続を意識した授業となるよう、デジタル教科書をはじめ、様々な視覚・音声教材を豊富に活用する指導を行った。さらに、TPR を中心とした、意味理解を伴った音声重視のインプットを工夫して大量に与えることで、生徒たちが楽しんで取り組める指導を行った。
- ・中学校 1 年生の授業においては、ラウンド制を用いて、検定教科書の題材を徹底的に活用して、多様なインプットを大量に与える工夫を凝らした指導を行った。
- ・中学校 2 年生の授業においては、チャンツ等の視覚・音声教材を豊富に活用して、工夫したインプットを行う指導を行った。
- ・中学校 3 年生の授業においては、協働学習を工夫して行うことで、リーディング力の向上を目指す指導を行った。
- ・全学年とも、音読を重視し、即興で話せる力の育成と英語教育の高度化をめざして、ペアワーク及びグループワーク、大量の Q&A 活動、多様なアウトプット活動を工夫して行った。
- ・第一年次に引き続き、小中高の教員の連携を行いつつ、中学校英語教育の高度化を目指す授業を行っていきけるよう、中学校各教員の研修・研究のみならず、教員間の研修・協議も重ねた。
- ・各学年のレベルに合わせながら、ほぼ all English の授業を行った。
- ・中学校英語教育の高度化を目指した授業改善を行っていくために、英語教育に関わる高い専門性を持つ、本学のみならず、他大学の先生方に授業を参観していただき、指導・助言をいただく機会をできるだけ多く持ち、授業改善に活かした。
- ・本校英語科教員が在籍している、大学院修士課程及び博士課程での学びを、日々の授業実践に活かせるよう、工夫を行った。
- ・本研究指定を通しての学び・研究を、公立中学校に還元できるよう努め、第二年次においては、千葉県公立中学校英語科教諭の視察を 1 週間受け入れた。
- ・本研究指定を通しての学び・実践・研究についての発表及び報告を行い、他の教育機関及び英語科教員に還元することができた。
- ・小中高連携に関わる研究会に参加し、研修を深めた。

- ・中学校3年生での授業ではJTE2名のチームティーチングを毎週1時間行うことで、個に応じた指導を丁寧に行えるよう、工夫した。
- ・ALTとのチームティーチングについても、ALTを活かす授業内容の向上に工夫を重ねた。
- ・中学校1年生及び2年生では、ALT1名及びJTE2名の計3名の体制で授業を行える時間を、週1回持たため、3名だからこそ可能となる授業の進め方を工夫した。
- ・4技能の統合及び英語教育の高度化を目指した指導方法の研修やワークシート作成や活用も丁寧に行えるよう努めた。
- ・実用英語技能検定取得に向けて、本校を準会場として年3回実施し、リスニング対策講座及び面接対策講座を実施した。
- ・豊富なアウトプット活動を行い、その成果が出るよう、各学年とも多様なプレゼンテーション活動を行い、様々な形態の音読テスト・暗唱テスト・スピーキングテストが実施できるよう工夫を行った。
- ・第一年次に引き続き、評価に関しては、授業内容・指導方法が評価と一体化したのようになるよう、本校英語科教員間で、工夫・研修を行い、様々な場面・方法で、評価が行えるよう、工夫した。
- ・今後の比較研究資料となるように、全学年とも学期末や学年末にスピーキングテスト及び英語学習に対する意識調査を実施する。
- ・英語教育の高度化に向けて、学年末に英検の「上級者セミナー」を開催する予定である。
- ・学年末に中学校第1学年全員を対象に英検の「英語能力判定テスト」を実施する予定である。
- ・第二年次に、初めて取り組んだ、「ジャパンアートマイル」の取組は、本研究指定の面からも、本学が指定を受けている「グローバル人材の育成プログラムの開発」に関わる視点からも、非常に有効な取組であった。
- 中学校英語教育の高度化に向けて、小・中・高間で作成したCAN-DOリストの内容については、更に検討を続けていく必要がある。
- 本校に在学する帰国生徒たちの高度な英語力の維持に向けての指導についても、工夫を続ける必要がある。さらに、本学附属小学校からの入学生と中学校受験を経ての外部生が入学してくるため、両者に有効な指導を更に検討していく必要がある。
- 授業実践では、リスニング力及びスピーキング力については進んだが、リーディング力及びライティング力を一層伸ばしていく工夫が更に必要となる。
- 授業内容及び指導方法が評価と一体化したものとなるよう、今後も検討・研修が必要である。
- さらなる英語教育の高度化に向けて、より一層の授業改善への努力・研鑽が必要となる。
- 定期考査の問題作成に関わり、評価と一体化したテストづくりとなるよう、一層の研修が必要である。
- 2年間で蓄積してきたデータ及び今後のデータの処理を丁寧に行い、これまでの授業実践及び研究を振り返り、更に研修を深める必要がある。

#### 【高等学校】

- ・中学校3年生と高等学校1年生の英語力のギャップを埋めるために、3回の入学前課題を設定した。
- ・中学校と高等学校の英語学習をスムーズにつなぐための連携カリキュラムの検討に着手した。



- ・ Skype を使ったオーストラリアの高校との交流授業の可能性を検討した。
- ・ オーストラリアの高校が研修旅行で来日した際、2校の先生方とお会いし、今後の交流に関しての可能性を話し合った。
- ・ 本校独自の実践研究会にて、英語教育の高度化をテーマにした英語科公開授業を実施した。
- ・ 中高連携を行っている先進校の研究会に参加し、研修を深めた。
- ・ 小中高接続を意識した CAN-DO リストの作成に着手した。
- ・ 2年生文系生徒に対して週1単位の選択授業を設定し、発展的学習に取り組みさせた。
- CAN-DO リストに関しては更に改善していく必要がある。
- ・ 中学校3年生と高校1年生の英語力のギャップを埋めるために、3回の入学前課題を実施した。
- ・ 中学校と高等学校の英語学習をスムーズにつなぐための連携カリキュラムの検討している。
- ・ 海外体験留学資料等を積極的に紹介している。
- ・ 中高連携を行っている先進校の研究会に引き続き参加し、研鑽を積んだ。
- ・ 小中高接続を意識した CAN-DO リストの改善を行っている。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

第一年次～第四年次，校種別

第一年次

- ・ 児童・生徒の興味・関心等の学習状況の変容について定量的に把握できる評価法について検討する。
- ・ それぞれの校種において実施する研究授業における研究会の記録から、各学年における生徒の実態把握並びに英語力を測定する。
- ・ 小学校で英語活動・英語科を経て中学校英語を経験した中学校2年生において英語検定を受検し成果を検証する。

第二年次～第三年次

【小学校】

- ・ 〈スピーキング〉歌，チャンツ，対話などの活動の様子を観察し，文章で評価する。
- ・ 〈リスニング〉児童英検 GOLD を3年生以上の児童に実施する。
- ・ 〈リーディング〉5・6年生については，アルファベットや簡単な単語を読み取るペーパーテストを行う。6年生については，絵本など文字を助けに読む様子を観察する。
- ・ 〈ライティング〉5年生ではアルファベットを書く，6年生では簡単な単語や文章を書くテストやワークシートを点数で評価する。

【中学校】

- ・ ALT を活用しての様々な形態でのスピーキングテストを実施し，豊富な英文添削も行う。
- ・ 英語実用技能検定を年3回実施することを継続する。
- ・ 授業において高等学校で学ぶ発展的な問題を導入する。
- ・ 授業内容及び指導方法が評価と一体化したものとなるよう，さらなる検討・研修を行う。
- ・ 英語教育の高度化に向けて，中身の濃い，実現性の高い CAN-DO リストとなるよう，さらな

る検討を行う。

- ・英語学習に対する情意面の意識調査の内容を更に検討する。
- ・定期テストの作成に関わり、指導方法及び評価と一体化したテストづくりとなるよう、一層、研修を深める。
- ・スピーキングテスト及び音読・暗唱テスト等のアウトプットの力を測る評価方法について、更に研修・研究を深める。

#### 【高等学校】

- ・英語教育の高度化に向けて、学習段階に応じた具体性のある CAN-DO リストが作成できるように更に研究を深める。
- ・1年次に ALT も活用してスピーチコンテスト、スピーキングテストなどを行い、パフォーマンス評価を行う。
- ・パフォーマンステストの適切な評価基準について研究する。
- ・2年次にグローバルな課題について自分の考えや意見を述べたり書いたりし、それについて適切なアセスメントの方法を研究する。
- ・グローバルな課題について自分の考えや意見を、海外の高校生などと交換し合える方法を検討する。
- ・2年次に自分の意見や考えを英文エッセイにまとめ、読み手が理解・納得するように書いているかという観点から評価する。また、その適切な評価方法について研究する。
- ・言語活動の高度化（発表，討論，交渉など）を測る評価方法について，研修・研究を深める。
- ・幅広い話題について書かれた英文を速く，正確に読み込む読解力を測定する。
- ・幅広い話題について話された英語の情報や考えなどを的確に理解する聴解力を測定する。
- ・自分の考えや主張をさまざまな活動（スピーチ，プレゼンテーション，ディベート，ディスカッションなど）において，口頭でアウトプットする力を測定する。
- ・自分の考えや主張を論理的に文章化する英語力を測定する。
- ・京都府内外の先進行の公開授業や研究発表会に積極的に参加し、研究や授業の進め方等について意見交換を行う。
- ・本研究が公開授業、研究発表会等を通じて地域に還元できるよう、京都府、京都市教育委員会との連携を模索する。

#### 第四年次

#### 【全体】

- ・英語教員にとって，特に小学校教員にとって有意義な研修会を定期的に持てたかを検証する。
- ・京都市の公立や他の附属においても本校同様の授業実践を行い，今回の研究が，他校の英語担当者にとって有意義な発信となったかを検証する。
- ・研究授業や公開授業の指導内容や指導方法が他の学校でも実践できるスタンダードのモデルであったか，公立の先生方との懇談会で検証する。
- ・各学年においてスピーキング・リスニング・リーディング・ライティングのテストから生徒の英語表現力並びに英語コミュニケーション能力の成果と課題を検証する。

- ・海外との交流における生徒の活動から、英語力育成の成果と課題を検証する。

○平成27年度の進捗状況・課題

【全体】

- 小中高で一貫して作成した Can-Do を用いた児童・生徒の自己評価により、メタ認知を高め自律した学習者になるように推奨しているが、指導と評価の一体化に関して研究途上である。
- パフォーマンス評価やポートフォリオ評価などにも取り組んでいるが、より良いルーブリック作成や、評価の妥当性、校内テスト問題の検討と妥当性の検証など今後必要であると考える。
- 実際に4技能を測定する外部テストを導入して英語力が伸びているかどうかを検証する必要がある。

【小学校】

- ・全学年について、各学年で設定した評価の観点に準拠した活動の成果を文言にて通知表に記入し、児童及び保護者に通知するようにした。
- ・低学年については、活動における「関心・意欲・態度」に重点を置き、活動の様子や進んで取り組んでいる姿を評価し、文言にて提示した。
- ・中学年については、外国語活動で示す3観点の特に「慣れ親しみ」に重点を置き、「聞く」「話す」を中心とした活動の様子や具体的なコミュニケーションの姿を評価し、文言にて提示した。
- ・高学年については、通知表においては「聞く」「話す」を中心とした活動の具体を文言にて提示したが、評価については4技能全てについてそれぞれ調査し、その都度児童には提示するようにした。
- ・高学年のスピーキング評価については、日々の学習におけるコミュニケーションの様子とともに、毎単元後に設定した表現活動をパフォーマンスチェックとして実施し、事前に示した観点を基に点数化するようにした。
- ・高学年のリスニング評価については、日々の聞き取りの様子に加え、学期末にペーパーテストを実施し、その解答状況を加味して評価するようにした。
- ・高学年のリーディングについては、慣れ親しんできた簡単な単語を声に出したり、アルファベットの初頭音などを聞き取る簡単なクイズなどをしたりすることを通して評価を行った。また、ペーパーテストにおいて、絵と単語を組み合わせるなど、慣れ親しんだ単語の意味と文字とを結び付ける活動も行った。
- ・高学年のライティングについては、慣れ親しんだ簡単な単語を写し書きしたり、単語を聞いて書いてみたりするなどの活動を行った。また、ペーパーテストにおいて、大文字を小文字に書き直したり、聞いたアルファベットを4線上に正しく書き表したりするような問題を設定し、その解答状況を加味して評価するようにした。
- ・外部テストとしては、昨年度の検討の結果、より小学校外国語科の学習内容が反映される児童英検の SILVER を第3学年以上で実施し、その結果を蓄積するようにした。
- 外部テストの内容と、日々の授業とのずれが生じており、テストの結果がそのまま小学校での外国語科の学習成果と言い切れない点も見えている。
- 外部テストにおける「話す」「書く」といった外国語表現に関する内容を図る方法が極端に少なく、また指標も少ない状態にある。

- 児童の学習の状況を，中学校教員などに見てもらおうなど，評価のあり方についても連携を更に密にしていくことが大切である。

#### 【中学校】

- ・ALT を活用しての様々な形態でのスピーキングテストを実施することができた。
- ・英語実用技能検定を年3回実施することができた。
- ・高等学校で学ぶ発展的な問題を授業の中で一部，導入することができた。
- ・授業内容及び指導方法が評価と一体化したものとなるよう，定期考査ごとに，検討・研修を行うことができた。
- ・英語教育の高度化に向けて，小学校・高等学校の教員と連携して，CAN-DO リストを作成することができた。
- ・第一年次に作成した CAN-DO リストを基に，検定教科書の单元ごとに「振り返りシート」を作成し，生徒たちが何を目標に学習を進めればよいのかをわかるようにすることができた。
- ・英語学習に対する情意面の意識調査を行うことができた。
- ・スピーキングテスト及び音読・暗唱テスト等のアウトプットの力を測る評価方法について，本学及び他大学の教員の助言を得ながら，研修を行うことができた。
- JTE 及び ALT による英文添削は行ったが，量的にまだ十分とはいかない。生徒たちの英語力向上に向けての有効な英作文指導及び英文添削方法について，検討・研修が必要である。
- 授業内容及び指導方法が評価と一体化したものとなるよう，一層の検討・研修を重ねる。
- 高等学校で学ぶ発展的な問題をどの程度，どのくらいの量，導入することが，中学校から高等学校への接続に対して有効であるのについて，中高の教員同士で一層，検討を重ねる。
- 英語教育の高度化に向けて，中身の濃い，実現性の高い CAN-DO リストとなるよう，さらなる検討を行う。
- 今年度，作成を始めた「振り返りシート」が，CAN-DO リストと一体化したものとなるよう，更に検討を行う。
- 英語学習に対する情意面の意識調査の内容の検討を更に進める必要がある。
- 定期テストの作成及び様々なワークシートが，評価と一体化したものとなるよう，一層，研修を深める。
- スピーキングテスト及び音読・暗唱テスト等のアウトプットの力を測る評価方法について，本学及び他大学の教員の助言を得ながら，更に研修を深めていく。

#### 【高等学校】

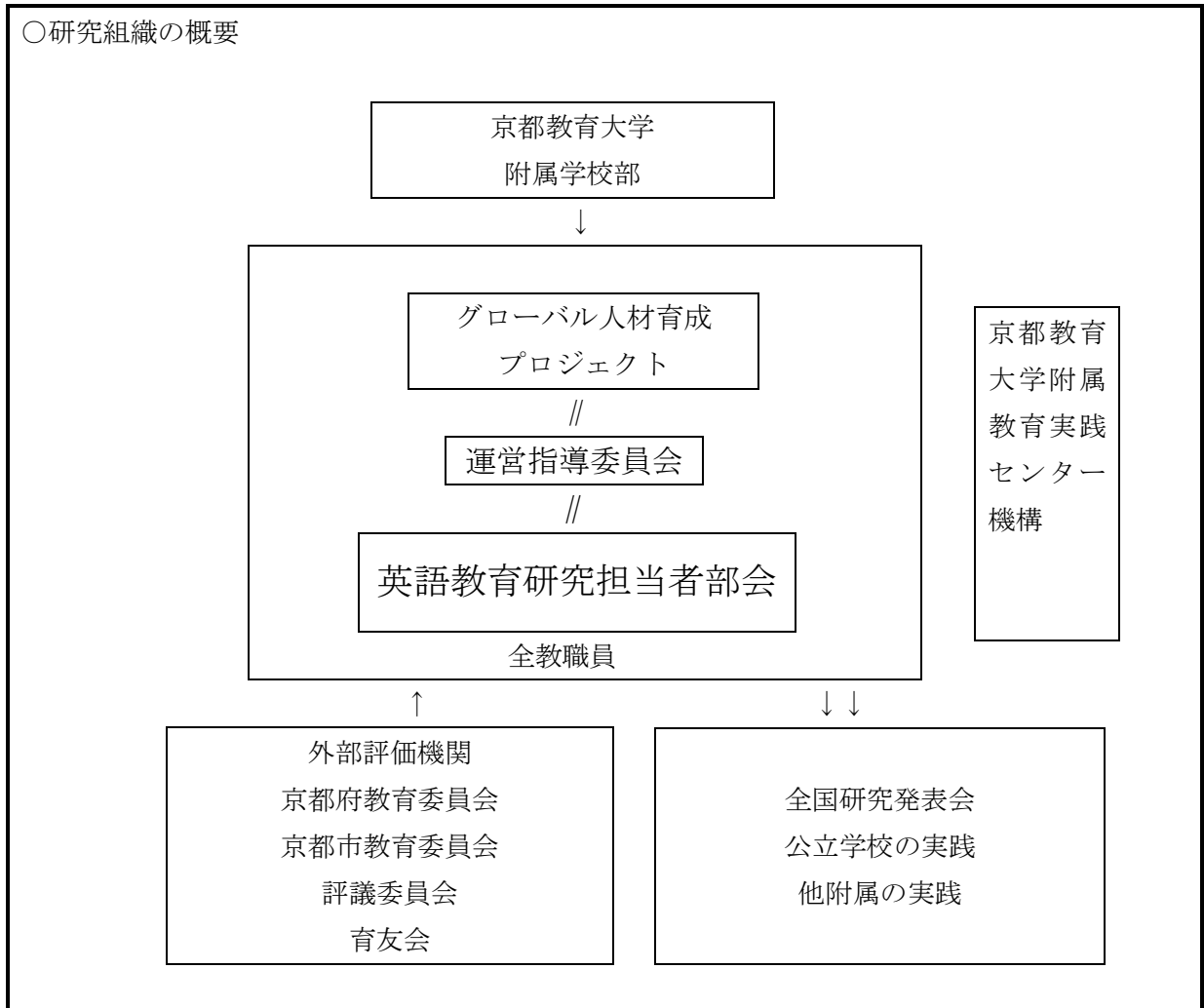
- ・CAN-DO リストの作成とともに，定期テスト等での評価以外にも，活動に適した評価方法についての検討を始めた。
- ・定期テスト等での評価以外の，活動に適した評価方法についての検討し，スピーチ等のパフォーマンス評価を行っている。
- ・入学前課題を利用したテストを行い，新入生の英語力を前もって把握できた。
- ・また，それを授業開始段階で役立てることができた。
- ・英語教育の高度化に向け，小学校・中学校の教員と連携して，CAN-DO リストを作成することができた。

- 高等学校入学直後に行っている中学校時の復習をどの程度の内容で実施するのが適当かを中高の教員間で調整する。
- 英語教育の高度化に向けて実行性のある CAN-DO リストとなるよう更に検討する。
- スピーキングテストやエッセイライティング等の評価方法について、更に工夫を重ねる。

#### 4. 研究組織

##### (1) 研究組織の概要

###### ○研究組織の概要



## (2) 運営指導委員会

## ①活動計画

## ○活動計画

- ・ 本研究開発に関わる運営指導委員会を組織し、委員会を各年度の前期学期、後期学期単位で開催し、評価を得る。
- ・ 大学教員を中心に英語担当教員、特に小学校教員を対象に英語研修会を企画・実施する。
- ・ 小学校英語に関わる学会・研修会・研究発表会・公開授業にできるだけ多く参加する。
- ・ 中学校英語教育に関わる学会・研修会・研究発表会・公開授業に数多く参加し、中学校英語教育の高度化に関わる研修を深め、さらには本研究指定における実践を紹介する機会を増やす。
- ・ 京都府教育委員会及び京都市教育委員会との連携を通じて、京都府内の公立中学校との連携を行い、本研究指定における中学校英語教育の高度化に向けての実践を紹介し、広く京都府内に還元できる機会を増やす。
- ・ 研究担当者は1回以上の研究授業を行い、指導案作成から事後研究までを全員で行う。また、授業公開や研究会を公立学校にも公開し、公立学校教員にも参加していただき意見交流を行う。
- ・ 大学教員は、研究授業の際に指導助言者として助言等を行い、カリキュラム・教材開発、評価等にも関わる。
- ・ 研究授業の際に指導助言者として助言等をいただき、評価に関わっていただく。
- ・ 運営指導委員会での評価結果を踏まえて、年次ごとに成果をまとめ、報告書の刊行による成果の公表を行う。
- ・ 大学の担当者が京都市・京都府教育委員会英語担当者と連絡を密にし、本事業成果を教員研修や免許更新講習などで紹介し、公立学校教員の指導力向上と児童生徒の言語コミュニケーション能力育成のために広く成果を還元できるようにする。

## ○平成27年度の進捗状況・課題

- ・ 各学期2回ずつ（計4回）の運営指導委員会を実施し、各校種の進捗状況とともに、小中高の一貫した学習到達目標や到達目標を踏まえた各校のカリキュラムについて、運営指導委員の先生より評価をいただき、国の動向等も踏まえながら、事業の実実施計画や各校の指導計画等の修正を行うことができた。
- ・ 各校で運営指導委員の先生や大学の担当教員を指導助言者とした校内研修の機会を持ち、授業の指導や英語教育に関する共通理解を図ることができた。
- ・ 小学校英語教育学会や関西英語教育学会など、小学校英語や小中連携に関する学会や授業交流会に参加し、多くの実践報告を聞くことができた。また、それぞれの学会等で出された提案などを踏まえ、日々の実践の中に活用できるものについて、随時取り入れていくことができた。
- ・ 小学校では、年間3回の校内研究会を実施し、研究担当者がそれぞれ提案授業を行った。全教員が授業参観及び事後研究会に参加し、英語教育に関する理念の共通理解や、授業を行う際に専科・ALT・担任の役割分担などについて意見を交流することができた。
- ・ 校内研究会に大学教員が指導助言者として参加し、授業の事後指導及び理論研究のための講

演を行った。また、月1回の担当者会議を通して大学教員から多くの知見を得、カリキュラムや教材開発に活用するようになった。

- ・ 運営指導委員や大学の研究担当教員が研究授業の中で指導助言を行い、実践の評価や今後の方向性について指導をもらうことができた。
- ・ 平成28年2月に中間報告会としての実践研究発表会を開催し、参会者に2年間の研究の成果としての研究紀要を配布する予定である。また、実践研究発表会では、全ての校種の公開授業を行い、参会者から意見をいただき、附属学校の取組の評価及び課題について次年度に引き継げるようにした。
- 研究授業だけではなく、日々の授業の様子も大学教員と連絡を取りながら見ていただき、助言をいただきながら授業の質を更に高めていくようにすることが大切であると考え。
- 公立小学校の教員への発信が不足している。公立学校の教員にも参加してもらえよう、運営指導委員会などで京都府・京都市の教育委員会指導主事へ連絡をし、公立小学校の教員にも授業を参観してもらえよう、体制づくりが必要だと考える。
- 異校種での実践の共有が不十分であると考え。各校の研究発表や授業実践を見るだけでなく、校種を超えてより多くの授業参観を行い、校種間の連携を意識した授業のあり方について、情報を得ていく必要がある。
- 小学校の場合、担任の役割を含め3人体制での指導をよりよく機能させるためにはどうすればよいか、またALTとJTEの打合せ時間が取れないといった課題もあり、小中高の連携・研修の中で、指導体制について更に検討を行う必要がある。
- 英語教育担当の本学専任教員をはじめ、外部の指導助言者4名を迎え、定期的に合同交流会・研究会を実施し、教育課程や指導内容、授業、評価などについて公開授業や研究協議への参加、研修や指導助言を行っているが、到達目標の作成や指導法など課題も多く、三年次・四年次において、課題を精査し、さらに英語の高度化に向けて各段階で望ましい指導や評価、カリキュラムについて協力して研究を行う必要がある。

## 5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	・ 小中高英語担当者カリキュラム検討会議	運営指導委員会
5月	・ 小中高大英語担当者会議 ・ 小学校公開授業事後研究会1 ・ 中学校公開授業事後研究会1	
6月	・ 小中高大英語担当者会議	
7月	・ 小学校公開授業事後研究会2 ・ 先進校視察（広島・広島大学、小学校英語教育学会）	運営指導委員会

8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先進校視察（千里ライフサイエンスセンター、外国語教育メディア学会主催全国研究大会）</li> <li>・先進校視察（熊本学園大学、全国英語教育学会熊本研究大会）</li> </ul>	
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高大英語担当者会議</li> <li>・オーストラリア姉妹校(ベレア校)交流学習（小学校）</li> </ul>	
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高大英語担当者会議</li> <li>・小学校公開授業事後研究会 3</li> </ul>	
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校公開授業事後研究会 2</li> <li>・中学校公開授業事後研究会 3</li> <li>・中学校公開授業事後研究会 4</li> <li>・先進校視察（東京学芸大学附属高等学校、公開教育研究大会及び情報教育公開研究会）</li> </ul>	運営指導委員会
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高大英語担当者会議</li> <li>・中学校公開授業事後研究会 5</li> </ul>	
1月		運営指導委員会
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高大英語担当者会議</li> <li>・教育実践研究発表会（小・中・高）公開授業・事後研究会</li> <li>・附属学校園研究発表会（7附属学校園合同実践発表会）</li> </ul>	
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高大英語担当者会議</li> <li>・小学校第3学年以上を対象に、児童英検（GOLD）を実施</li> <li>・中学校第1学年生を対象に、英語能力英検を実施</li> <li>・2年目総括</li> </ul>	
<p>【その他の取組】※あれば記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・6月 関西英語教育学会 (KELES) 2015 年度第 20 回研究大会において、「小学校外国語活動とのスムーズな接続及び中学校英語教育の高度化に向けての TPR とラウンド制の活用」について報告を行った。</li> <li>・9月 立命館大学英語教員教授業力向上研修会 (adeng) において、「中学校英語教育の高度化に向けての TPR とラウンド制の活用」について報告を行った。</li> <li>・10月 全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）において報告を行った。</li> </ul>		